

鹿児島県における家庭科教育の実施状況 —中学校家庭科教員の実態—

黒 光 貴 峰*・新馬場 有 希**・徳 重 礼 美**

(2010年10月26日 受理)

Home Economics Education in Japanese Junior High School.-The Situation in Kagoshima Prefecture-

KUROMITSU Takamine*, SHINBABA Yuki**, TOKUSHIGE Hiromi**

要約

【目的】本研究は、鹿児島県における中学校技術・家庭科（家庭分野）の指導状況を把握し課題等の検討を行うことを目的としている。

【方法】研究方法は、質問紙調査であり、調査対象は鹿児島県の中学校技術・家庭科（家庭分野）の担当教員である。調査期間は2008年11月、配布数264部、有効回収数91部（有効回収率34.5%）であった。

【結果】鹿児島県の家庭科担当教員の性別は、「女性」92.3%、「男性」6.6%であった。年齢は、「30歳代」34.1%が最も多く、次いで、「50歳代」22.0%であった。出身地は、「鹿児島県」86.8%、「その他」6.6%であった。最終学歴は、「大学院」1.1%、「大学」54.9%、「短期大学」39.6%であった。出身学部は、「家政系」30.8%、「教育系」29.7%であった。教員歴は、「10年以下」の者が31.9%であった。家庭科担当歴は、「10年以下」の者が68.1%であった。免許の保有状況は、「家庭科教員免許（専修・1種・2種）保有者」38.5%、「臨時免許」および「免許外」の者が56.1%であった。家庭科以外に指導している教科がある教員は70.3%であった。家庭科の各領域に対する意識については、「食物」59.4%、「被服」52.8%の教員が得意であると感じており、逆に「保育」48.4%、「住居」69.2%、「家庭生活」63.8%の教員が得意でないと感じていた。今後の課題としては、免許外教員へのサポートや、得意でないと感じている教員が多い領域での教材、授業開発が必要である。

Keywords：鹿児島県・家庭科教育・中学校家庭科教員

* 鹿児島大学教育学部 准教授

** 鹿児島大学大学院教育学研究科大学院生

I. はじめに

中学校の家庭科教育は、1947年の発足以来、名称や内容、履修形態などにおいて多様に変化してきた¹⁾。現在、学校教育における家庭科教育の指導状況に関する研究は、各領域^{2)~5)}の教育内容の検討や実施状況の調査などが都道府県や各地域単位を対象に部分的に行われているのが現状である^{6)~16)}。例えば上里^{17) 18)}らは、12の都道府県で中学校技術・家庭科(家庭分野)の実施状況の調査を行い、家庭科教員の特徴として女性がほとんどである、専任の教員が少ない等の実態を明らかにしている。しかし、実際はそれぞれの地域によって状況が異なるため、これからの家庭科教育の充実に向けて各都道府県における指導状況を把握し課題を検討していくことが必要である。また、近年、学習指導要領の改訂が行われたため、新学習指導要領へ対応した教育内容の検討も必要である¹⁹⁾。そこで本研究では、鹿児島県における中学校技術・家庭科(家庭分野)の指導状況を把握し課題等の検討を行うことを目的としている。

II. 方法

研究方法は、鹿児島県の中学校技術・家庭科(家庭分野)の担当教員を対象に、郵送による質問紙調査を実施した。調査時期は2008年11月である。また質問紙の配布数は264部、有効回収数91部、有効回収率34.5%であった。調査内容は、1. 調査対象の属性、2. 免許の保有状況、3. 他教科との兼任状況、4. 授業についてである。

III. 結果および考察

1. 調査対象の属性

(1) 性別

鹿児島県の家庭科担当教員の性別は、「女性」92.3%、「男性」6.6%であった(図1)。

(2) 年齢

年齢は、「30歳代」34.1%が最も多く、次いで、「50歳代」22.0%、「20歳代」17.6%、「40歳代」17.6%であった(図2)。この割合の差は、家庭科の教員採用者数や各学校への教員の配置、勤務の継続状況等が複雑に影響し合っているものと考えられる。

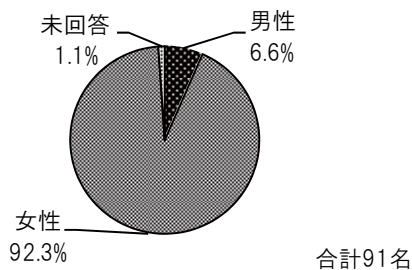


図1. 性別

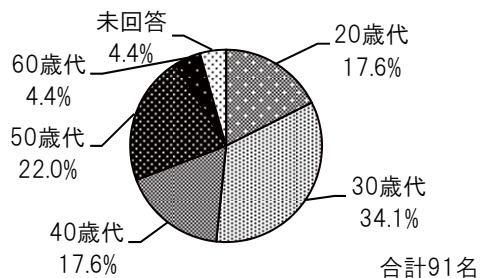


図2. 年齢

(3) 出身地

出身地は、「鹿児島県」86.8%、「その他」6.6%であった(図3)。「その他」の内訳としては、「宮崎県」、「山口県」、「三重県」、「群馬県」、「東京都」等であった。

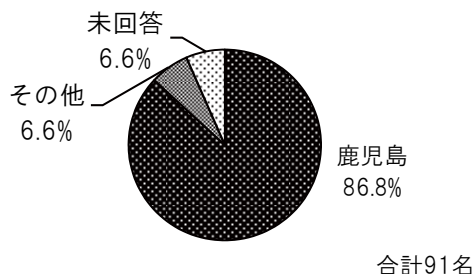


図3. 出身地

(4) 学歴

最終学歴は、「大学」54.9%が最も多く、次いで、「短期大学」39.6%、「大学院」1.1%であった(図4)。出身学部は、「その他」34.1%が最も多く、次いで、「家政・生活科学部」30.8%、「教育・学芸学部」29.7%であった(図5)。「その他」の内訳としては、「文学系」、「音楽系」、「外国語系」等であった(表1)。

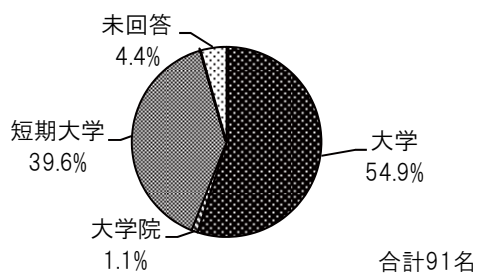


図4. 学歴

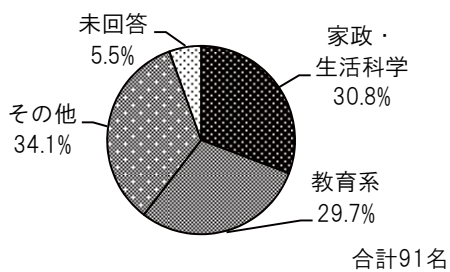


図5. 出身学部

表1. 出身学部

学部	名
文学系	10
音楽系	3
外国語系	3
理学部系	2
工学部系	1

出身学科は、「その他」42.9%が最も多く、「教員養成系」23.1%、「家政系」19.8%であった(図6)。「その他」の内訳としては、「英文学系」、「国文学系」、「生活科学系」等であった(表2)。大学での出身専攻は、「その他」53.8%が最も多く、次いで、「被服」12.1%、「食物」8.8%、「家庭科教育」5.5%、「住居」2.2%であった(図7)。「その他」の内訳としては、「音楽系」、「英語系」、「国語系」等であった(表3)。

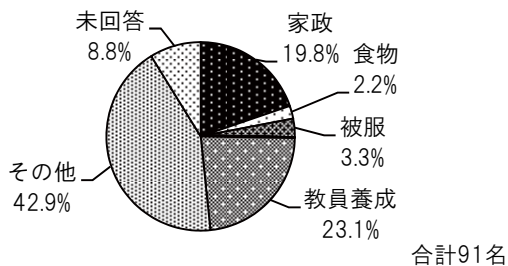


図6. 出身学科

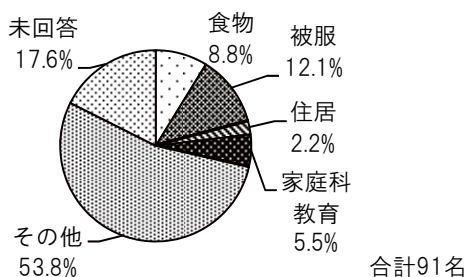


図7. 出身専攻

表2. 出身学科

学 科	名
英文学系	8
国文学系	7
生活科学系	5
音楽系	3
体育科系	2
理学系	2
技術系	1
史学系	1

表3. 出身専攻

専 攻	名
音楽系	12
英語系	5
国語系	3
数学系	2
理科系	2
社会系	2
技術系	2
芸術系	1

(5) 教員歴と家庭科担当歴

教員歴は、「11～20年」28.6%が最も多く、次いで、「30年以上」19.8%、「5年以下」17.6%、「21～30年」14.3%、「6～10年」14.3%であった(図8)。家庭科担当歴は、「5年以下」56.0%が最も多く、次いで、「30年以上」13.2%、「6～10年」12.1%、「11～20年」8.8%、「21～30年」6.6%であった(図9)。家庭科教員の半数以上が5年以下の担当歴である。教員歴と家庭科担当歴に差がみられる理由としては、教員として勤務する途中で担当を他教科から家庭科に変更した教員や、所属する学校の教員数等の関係で複数教科を兼担している教員がいるなどの事情が反映していると考えられる。

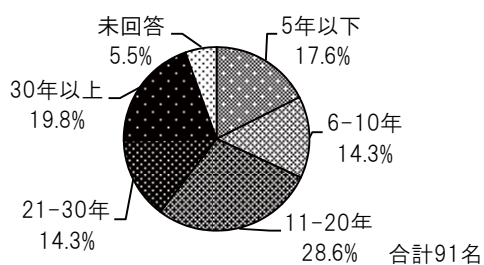


図8. 教員歴

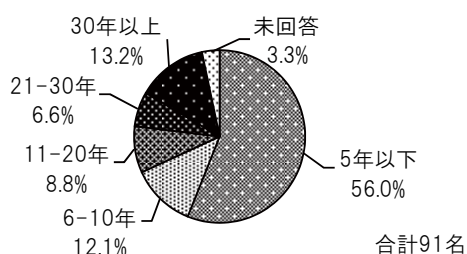


図9. 家庭科教員歴

2. 免許の保有状況

免許の保有状況については、「免許外」47.3%が最も多く、次いで、「1種」18.7%、「2種」18.7%、「臨時免許」8.8%、「専修」1.1%であった（図10）。家庭科の教員免許「専修」・「1種」・「2種」を保有している者は38.5%であった。また、全体の56.1%は「臨時免許」と「免許外」であり、家庭科を指導している教員のうち、半数以上が家庭科を専門としていない実態が明らかになった。

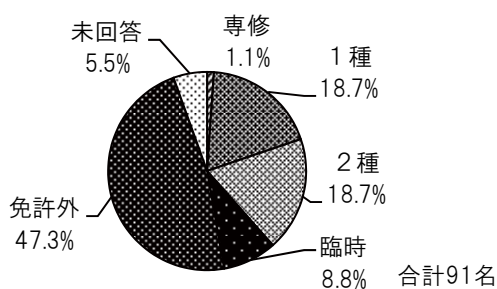


図10. 免許の保有状況

3. 他教科との兼担状況

他教科を兼担している家庭科担当教員は70.3%であった（図11）。家庭科以外に指導している教科としては、「国語」が13名と最も多く、次いで、「英語」12名、「音楽」11名、「美術」11名等であった（表4）。

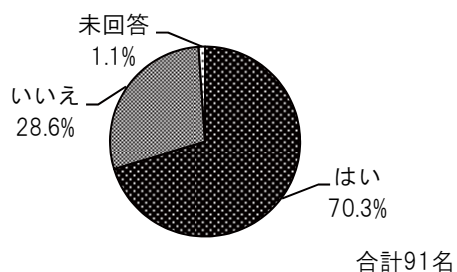


図11. 他教科との兼担状況

表4. 兼担している教科

教科	名
国語	13
英語	12
音楽	11
美術	11
数学	9
特別支援学級	9
技術	6
理科	5
社会	3

4. 授業について

(1) 各領域に対する意識

各領域に対する意識を、食物、被服、保育、住居、家庭生活の領域に分け、「とても得意」、「やや得意」、「あまり得意でない」、「苦手」の4段階で回答を得た。また、その理由を自由記述で回答を得た。

(i) 食物領域

食物領域では、「やや得意」45.1%が最も多く、次いで、「あまり得意でない」26.4%、「とても得意」14.3%、「苦手」5.5%であった(図12)。「とても得意」、「やや得意」と回答した者の理由としては、「生徒の関心が高いから」、「大学で専攻していたから」、「自分自身が興味があるから」という意見が多く、教員自身の経験や生徒の興味・関心が意識に影響していると考えられる(表5)。一方、「あまり得意でない」、「苦手」と回答した者の理由としては、「免許外だから」、「専門外だから」、「調理が苦手だから」という意見が多く、技術面での不安が苦手意識につながっていると考えられる。

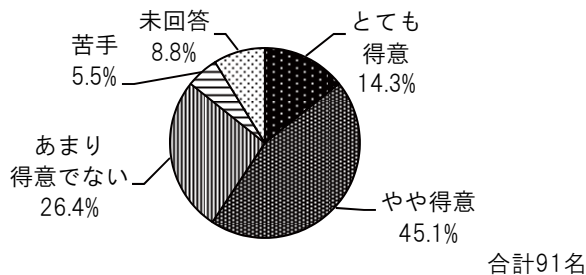


図12. 食物領域に対する意識

表5. 食物領域に対する意識

「得意」である理由	票	「不得意」である理由	票
生徒の関心が高いから。	8	免許外だから。	4
大学で専攻していたから。	7	専門外だから。	3
自分自身が興味があるから。	7	調理が苦手だから。	2
実習ができるから。	2	自信がないから。	1
指導内容が明確だから。	2	生徒の身につかないから。	1
家で行っていることだから。	1	研修の時間がないから。	1
得意だから。	1	生徒の関心が低いから。	1
大切だと思うから。	1	実習の時間がとれないから。	1
資料等が豊富だから。	1		
研修の成果から。	1		
日常生活との関連を持たせやすいから。	1		
一貫した指導ができるから。	1		

(ii) 被服領域

被服領域では、「やや得意」41.8%が最も多く、次いで、「あまり得意でない」28.6%、「苦手」12.1%、「とても得意」11.0%であった(図13)。「とても得意」、「やや得意」と回答した者の理由としては、「自分自身が製作が好きだから」、「研修の成果から」、「生徒に意欲があるから」、「生徒が完成した喜びを味わえるから」という意見が多く、食物領域と同様、教員自身の経験や生徒の興味・関心が意識に影響していると考えられる(表6)。一方、「あまり得意でない」、「苦手」と回答した者の理由としては、「技術面に不安があるから」、「専門外だから」、「免許外だから」、「裁縫が苦手だから」という意見が多く、これも食物領域と同様に技術面の不安が苦手意識につながっていると考えられる。

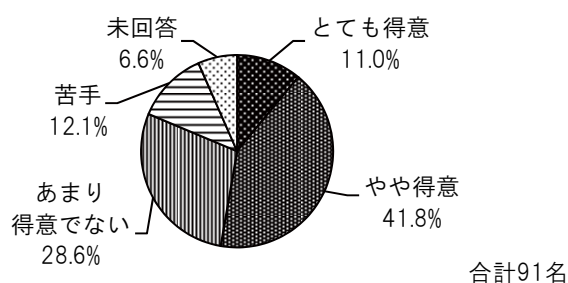


図13. 被服領域に対する意識

表6. 被服領域に対する意識

「得意」である理由	票	「不得意」である理由	票
自分自身が製作が好きだから。	7	技術面に不安があるから。	9
研修の成果から。	3	専門外だから。	5
生徒に意欲があるから。	3	免許外だから	3
生徒が完成した喜びを味わえるから。	3	裁縫が苦手だから。	2
大学で専攻していたから。	2	生徒の技術面の力が低いから。	1
自分自身が興味があるから。	2	設備が整っていないから。	1
実習ができるから。	2	製作で全員に対応しきれないから。	1
生徒の工夫を取り入れることができるから。	1	自信がないから。	1
家でやっていることだから。	1		
指導内容が明確だから。	1		

(iii) 保育領域

保育領域では、「やや得意」39.6%が最も多く、次いで、「あまり得意でない」37.4%、「苦手」11.0%、「とても得意」5.5%であった(図14)。「とても得意」、「やや得意」と回答した者の理由としては、「子育てと関連しているから」、「自分自身が興味があるから」、「幼稚園等に勤めた経験があるから」という意見が多く、教員自身の経験が意識に影響していると考えられる(表7)。

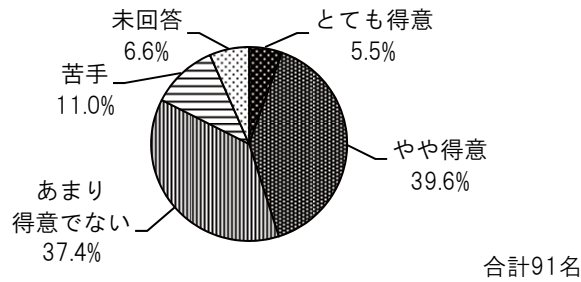


図 14. 保育領域に対する意識

表 7. 保育領域に対する意識

「得意」である理由	票	「不得意」である理由	票
子育てと関連しているから。	13	専門外だから。	7
自分自身が興味があるから。	3	講義形式の授業になってしまうから。	6
幼稚園等に勤めた経験があるから。	3	免許外だから。	4
実習ができるから。	2	子育ての経験がないから。	4
生徒が幼児と接する機会が地域で多いから。	1	教材研究が難しいから。	3
おもちゃの製作など楽しめるから。	1	実習先の先生方に迷惑をかけてしまうから。	1
		生徒が幼児の気持ちになるのが難しいから。	1
		自信がないから。	1
		生徒の興味が薄いから。	1
		授業時数の確保が難しいから。	1

一方、「あまり得意でない」「苦手」と回答した者の理由としては、「専門外だから」、「講義形式の授業になってしまうから」、「免許外だから」、「子育ての経験がないから」、「教材研究が難しいから」という意見が多く、「とても得意」、「やや得意」と感じている理由と合わせて考えても、教員自身の経験や授業の行いにくさが意識に影響していると考えられる。

(iv) 住居領域

住居領域では、「あまり得意でない」57.1%が最も多く、次いで、「やや得意」20.9%、「苦手」12.1%、「とても得意」1.1%であった(図15)。「とても得意」、「やや得意」と回答した者の理由としては、「自分自身が興味があるから」、「指導内容が明確だから」、「大学で専攻していたから」、「実習ができるから」という意見が多く、教員自身の経験や指導内容が意識に影響していると考えられる(表8)。一方、「あまり得意でない」、「苦手」と回答した者の理由としては、「免許外だから」、「専門外だから」、「教材研究が難しいから」、「教材・教具が少ないから」、「実習が少ないから」という意見が多く、教材・教具や実習が少ないことによる授業の行いにくさが苦手意識につながっていると考えられる。

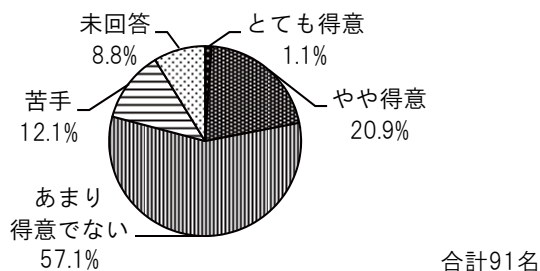


図 15. 住居領域に対する意識

表 8. 住居領域に対する意識

「得意」である理由	票	「不得意」である理由	票
自分自身が興味があるから。	3	免許外だから。	8
指導内容が明確だから。	2	専門外だから。	5
大学で専攻していたから。	2	教材研究が難しいから。	5
実習ができるから。	2	教材・教具が少ないから。	3
日常生活に関連を持たせやすいから。	1	実習が少ないから。	3
		生徒のプライバシーと関わるから。	2
		授業時数が少ないから。	1
		苦手だから。	1
		生徒の興味が薄いから。	1
		自信がないから。	1

(v) 家庭生活領域

家庭生活領域では、「あまり得意でない」49.5%が最も多く、次いで、「やや得意」26.4%、「苦手」14.3%、「とても得意」2.2%であった（図 16）。「とても得意」、「やや得意」と回答した者の理由としては、「生徒の関心が高いから」という意見が多く、そのことが意識に影響していると考えられる（表 9）。一方、「あまり得意でない」、「苦手」と回答した者の理由としては、「生徒のプライバシーと関わるから」、「専門外だから」、「免許外だから」、「指導しにくいから」という意見が多く、指導内容が家庭環境など生徒のプライバシーと密接に関係していることや授業の行いにくさが苦手意識に影響していると考えられる。

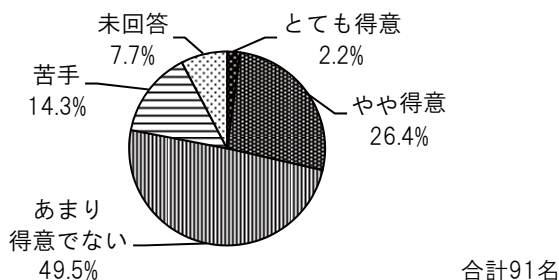


図 16. 家庭生活領域に対する意識

表9. 家庭生活領域に対する意識

「得意」である理由	票	理由	票
生徒の関心が高いから。	2	生徒のプライバシーと関わるから。	17
大学で専攻していたから。	1	専門外だから。	5
おもしろいから。	1	免許外だから。	4
実生活と直結しているから。	1	指導しにくいから。	4
自分自身の経験が生かされるから。	1	教材研究が難しいから。	2
		生徒の興味が薄いから。	2

(2) 授業で使用している教材

授業で使用している教材（教科書以外）について、「資料集」、「資料プリント」、「演習プリント」、「ビデオ」、「OHP」、「模型」、「その他」の7つの選択肢を設け、複数回答で回答を得た（図17）。食物領域では、「資料プリント」30.1%を使用している教員が最も多く、次いで、「演習プリント」19.9%、「ビデオ」17.3%であった。被服領域では、「資料プリント」30.4%が最も多く、次いで、「演習プリント」16.8%、「その他」14.9%であった。「その他」には、「ノート」や「段階標本」という回答がみられた。保育領域については、「資料プリント」28.1%が最も多く、次いで、「ビデオ」25.9%、「演習プリント」14.6%であった。住居領域については、「資料プリント」30.1%が最も多く、次いで、「演習プリント」19.2%、「ビデオ」15.4%であった。家庭生活領域については、「資料プリント」28.2%が最も多く、次いで、「ビデオ」23.5%、「演習プリント」18.8%であった。このことから、教科書を補足するために、多くの教員が資料プリントを作成していることが分かった。また、保育、家庭生活領域は、他の領域に比べビデオ教材の割合が高かった。

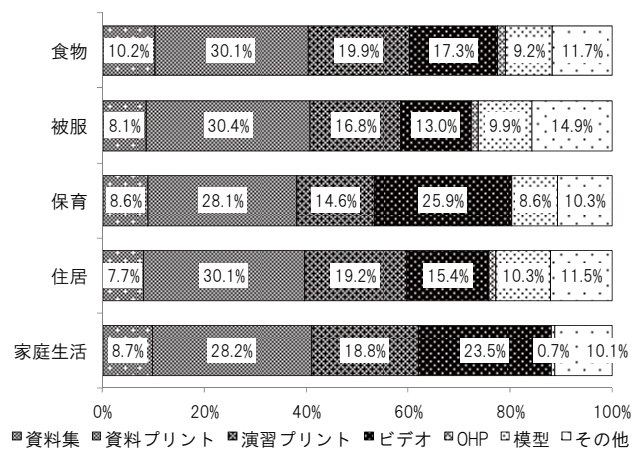


図17. 授業で使用している教材

(3) 授業を行うにあたり困っていること

授業を行うにあたり困っていることについて自由記述で回答を求めた(表10)。最も多かった意見は、「授業の進め方が難しい」、次いで、「研修や研究会などの機会が少ない」、「授業時間が足りない」などが挙げられた。また、「教材・教具」、「予算」、「設備」、「専任教員」の不足の問題や、「領域によって生徒の興味が偏る」、「生徒の基礎的・基本的な力に差がある」、「生徒数が多すぎる」という意見もみられた。

表 10. 授業を行うにあたり困っていること

自由記述で回答された意見	票
授業の進め方が難しい。	8
研修や研究会などの機会が少ない。	4
授業時間数が足りない。	3
教材・教具の不足。	3
予算の不足。	3
専任教員の不足。	2
設備の不足。	2
免許外で分からないことが多い。	2
領域によって生徒の興味が偏る。	2
題材の選定が難しい。	2
生徒の基礎的・基本的な力に差がある。	2
生徒数が多すぎる。	2
実習の授業でT・Tを取り入れたい。	2
試験問題の作成が難しい。	1
他教科との兼担で忙しい。	1
実習の準備が大変。	1

IV. まとめ及び考察

以上、調査結果より鹿児島県の中学校家庭科の教員の特徴として、女性教員がほとんどである、20代、30代の教員が占める割合が高い、教員歴と家庭科担当歴に差がある、半数近くが免許外である、70%以上の教員が他教科と兼担していることなどがあげられた。

また、大学での専攻や教員自身の興味・関心、日常生活での経験が、領域を教えるにあたり「得意である」という意識に影響していた。一方、免許外であることや技術面での不安、教材・教具の不足は、領域を教えるにあたり「得意でない」という意識に影響しており、サポートが必要である。具体的な方法としては、研修の充実や他校種との情報交換の場を設けること、実習においてTT方式の授業を取り入れることなどがある。また、教材・教具が不足している領域や経験から指導できない領域、生徒のプライバシーと関わる領域は「得意でない」と感じる教員が多いこ

とから、今後の教材開発・授業開発の必要性が示唆された。

本研究は、日本家庭科教育学会九州地区会第13回研究発表にて発表を行ったものに加筆、修正したものである。

謝辞

本研究を進めるにあたり、調査にご協力頂きました鹿児島県の中学校家庭科教員の皆さまに感謝申し上げます。

参考文献

- 1) 佐藤文子, 川上雅子: 家庭科教育法, 高陵社書店 (2004)
- 2) 磯部 由香, 村上陽子, 杉山綾子: 中学校の家庭科担当教員による食に関する指導についての意識と実態, 三重大学教育学部附属教育実践総合センター紀要 (29), 75-78 (2009)
- 3) 岡崎布佐子, 菊地るみ子: 高等学校家庭科における住生活内容の指導実態と課題, 高知大学教育実践研究 (16), 39-46 (2002)
- 4) 宮本智代, 菊地るみ子: 中学校・高等学校家庭科における家族・家庭教材の指導実態と課題, 高知大学教育実践研究 (16), 27-37 (2002)
- 5) 速水多佳子, 関川千尋: 学校教育における住居領域の教育システムの有効性について, 日本家政学会誌 Vol.51 No.4, 317-330 (2000)
- 6) 馬路泰蔵: 中学校家庭科の担当教員の状況-学事関係職員録の解析-, 日本家政学会誌 第45巻 第5号, 437-445 (1994)
- 7) 浜島京子: 中学校家庭科担当者における免許外教員の実態と問題, 福島大学教育学部論集第52号, 21-31 (1992)
- 8) 浜島京子: 中学校家庭科免許外教員の実態-全国の状況-, 福島大学教育実践研究紀要第17号別冊, 55-64 (1990)
- 9) 浜島京子: 教育課程審議会(中間まとめ)にみる家庭科教育に対する現場教師の意識-福島県の実態-, 福島大学教育実践研究紀要第13号, 37-44 (1988)
- 10) 桑畑美沙子: 技術・家庭科の男女共学に関する熊本県の動向(第1報)-1985年度における家庭系列への乗り入れ実施状況, 家庭科教育学会誌 30(3), 6-13 (1987)
- 11) 小川裕子, 田原リツ子, 谷本徳子: 技術・家庭科「相互乗り入れ」の定着状況-山口県における1981年と1983年の実態比較-, 家庭科教育学会誌 28(2), 15-20 (1985)
- 12) 梅原清子, 倉盛三知代: 技術・家庭科の「相互乗り入れ」に関する取り組み(第2報)-和歌山県における教師の意識-, 家庭科教育学会誌 26(3), 45-50 (1983)
- 13) 倉盛三知代, 梅原清子: 技術・家庭科の「相互乗り入れ」に関する取り組み(第1報)-和歌山県の実態-, 家庭科教育学会誌 26(3), 37-44 (1983)
- 14) 新福祐子, 加地芳子: 家庭科担当者の実態と教科担当意識-大阪府の実態-(第1報), 家庭科教育学会誌 26(3), 23-29 (1983)
- 15) 菊地るみ子: 高知県の実態からみた中学校家庭科教育の問題点, 家庭科教育学会誌 26(2), 51-56 (1983)
- 16) 久保木道子: 学習指導要領改訂期における技術・家庭科教育の実態と教師の意識-愛媛県の場合-, 家庭科教育学会誌 25(2), 70-76 (1982)
- 17) 上里京子, 小島郷子, 高木直, 今野智津子, 堀内かおる, 福留美奈子, 綿引伴子, 鶴田敦子: 12の都道府県調査からみる中学校家庭科教育の実施状況(1)-家庭科教員の実態-, 日本家庭科教育学会誌第42巻 第2号, 17-22 (1999)
- 18) 高木直, 今野智津子, 綿引伴子, 堀内かおる, 福留美奈子, 小島郷子, 上里京子, 鶴田敦子: 12の都道府県調査からみる中学校家庭科教育の実施状況(2)-実施状況及び県別比較-, 日本家庭

科教育学会誌第42巻第2号, 23-29 (1999)

19) 文部科学省: 中学校学習指導要領解説 技術・家庭編 (2008)